

2008年早春

5名の生徒と2人の教師が、新たな出会いを求めてシアトルに向け旅立ちました。

以下の手記はその出会いと、想いの記録です。

2007年度Kent地区高校訪問記（生徒編）

- (1) My first visit to America! 3年3組 K . H
- (2) I'm an American 3年5組 H . R
- (3) My Precious Memories 3年6組 N . A
- (4) 二週間の記録 3年7組 O . A
- (5) 出会いと別れの2週間 3年8組 E . M

2007年度Kent地区高校訪問記（教師編）

(1) ケントウッド高校を訪問して（Kentwood高校編）

（2008年3月22日（土）～29日（土））

英語科 加藤 悦子

(2) ケント再訪（Kentlake高校編）

（2008年3月29日（土）～4月5日（土））

社会科 浜野 斗紫子

My first visit to America!

3年3組 K.Y

今回のこの国際交流が私にとって初めての海外でした。アメリカの高校生やいろいろな人と交流できたり学校生活を見ることができたり、とても楽しみでしたが、その反面英語もまともに話せず、何もかもがまったくわからない状態だったのでとても不安なまま出発を迎えました。まず機内でのアナウンスの聞き取れなさに、これから2週間本当にアメリカで過ごせるのかかなり心配になりましたが、空港に到着して1軒目のホストのKelsiと会ってからはとにかく会話をするのに必死になって心配なものも忘れてしまうくらいでした。Kelsiは同い年でしたが、自分が思い描いていた“アメリカ人はみんな大人っぽい！”というイメージよりもかわいらしい雰囲気だったので少しほっとしたのを覚えています。到着した日は土曜日だったので丸2日ホストファミリーと一緒に休日を過ごしました。とにかくアメリカにはびっくりすることだらけでした。あらゆるものが大きくて、食べ物も完食した記憶がありません。家も庭にプールがあったり、すごく大きな冷蔵庫や食料庫があったり、家の中を探検するだけでも面白かったです。

到着した日にはスペースニードルという展望タワーやシアトルの繁華街などの観光地に連れて行ってもらいました。アメリカの人たちは本当にフレンドリーで、街を歩いていたるだけでも話しかけてきてくれたのには驚きました。

向こうでの買い物もとても楽しくて、日本とはまたまったく違う雰囲気だったり、いろんなものがカラフルで大きくて見るだけでも楽しめるものばかりでした。アメリカ人の色彩感覚は私にとってはかなりおかしくて不思議に思ったものもいくつもありました（レモン味なのにピンク色だったり...！）。

その翌日の日曜日はイースターでほとんどのお店が閉まっていたましたが、Kelsiの家はキリスト教だったので、おじいちゃんやおばあちゃんも家に集まって晩ごはんを食べました。このころから初めよりは少しだけ英語が聞き取れるようになって、知っている単語をつないでつないでなんとか英語で伝えられるようにもなりました。お父さんやお母さんも英和辞典をひいてくれたり日本語と一緒に覚えたりしてくれたのでかなり助けてもらいましたが...

学校に通い始めてからも同年代の子たちの生活や服装を見ることができたり、いろんなところで話しかけてもらえたり、とても楽しかったです。日本とは違って授業中にドーナツを立ち歩いて食べていたり、普通におしゃべりしていたり、びっくりすることもたくさんありましたが、みんな楽しんで学校生活をおくっていたのが印象的でした。アメリカで

は自分の選択によって学年関係なく同じ授業で学ぶこともあるので、自分がもう日本で習っている内容もあって、説明の仕方の違いなども発見できて面白かったです。日本語クラスでは日本での英語の授業とはまったく違う雰囲気ではじめは驚きましたが、みんな学習意欲がすごくて日本とは比べ物にならないくらい積極的に授業に参加していました。1週間Kentwood高校に通ってみると、自分もここに通ってみたいと思えるほどとても自由で楽しかったです。

2週目のホストのHaはベトナム人で、家の中ではベトナム語と英語の両方がとびかっている家でした。お父さんとお母さんはあまり英語を話せないので少し大変なこともありましたが、ゆっくり会話することができて逆に自分も練習できてよかったです。Haは14歳で私よりも年下だったのに、下に3人も兄弟がいたのでともしっかりしていました。とにかく家の中はにぎやかで、たくさん遊んで楽しめました。日本食も家で作りましたが、海藻など外国の人が結構苦手なものも案外好評でした。

Kentlake高校は同じ公立高校で同じ市内なのにKentwood高校とはまたまったく違う雰囲気でした。校舎もまだ新しく、学校とは思えないような構造になっていたり、1週間アメリカで過ごしていたのにまだまだびっくりすることが多かったです。日本語クラスができて1年目だったのに、みんないろんな単語を知っていたり、少し会話もできたりしたので驚きました。先生が日本人（Kentwoodの日本語クラスの先生は韓国人！）だったので日本の英語の授業に少し近かったです。

Kentlake高校では名前や文章をすべて漢字に直して習字をしたり、マーケティングという授業でいなり寿司を作ってそれを売ったり、より多くの生徒と交流できて、より多くのことを知れてよかったです。

このころはすでに周りみんなが外国人であることにまったく違和感もなく、むしろ“日本に帰りたくない！”とまで思えるほどになっていました。初めのうちはアメリカの食生活や雰囲気になじめるのか、きちんと意思疎通ができるのか、かなり心配事もありましたが、そんなものもすべてなくなってしまうくらいに2週間の国際交流はとても楽しくて、忘れられないものになりました。私がアメリカに行けて、楽しく過ごして帰って来られたことに関わってくださったすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。これからはもっと英語が話せるようになってもう1度Kentに行けるのを目標に頑張っていきたいと思います。

I'm an American!

3年5組 H.R

私は2週間アメリカですばらしい時間を過ごすことができました。出発前は少し不安もあったのですが、ホストファミリーと生活していくうちにだんだん楽しくなっていました。アメリカには本当にたくさんの人種の人々がいて世界中から集まってきているという印象を受けました。もし制服をきていなかったら普通にアメリカ人と思われたでしょう。そのため、カルチャーショックを受けることもなく、なじむことができました。

到着した日は土曜日で、タコマ空港に着くとホストのLaurenが迎えにきてくれました。車の中でたくさん英語で質問をされて初めてアメリカだと実感しました。出発前に特訓をしたことやホストファミリーがわかりやすく話してくれていたこともあり、楽しく会話できました。午後からはSeattleの街に行ってスペースニードルとスタバ1号店と市場を観光したのですが、家に帰ると時差ぼけと疲れ（26時間以上は起きていた）で即寝てしまいました。次の日はEasterだったのでカップケーキを作ったりお菓子探しをしたりしました。

Laurenはとても賢くて、日本語クラスではみんなに日本語を教えていました。発音もよく、私が教えてもらったこともかなりありました。多分私が英語を話すよりLaurenは日本語を話せたと思います(笑)。お父さんもお母さんも毎日「今日の学校はどうだった？」と聞いてくれて、お話するのが楽しみでした。Laurenには毎日たくさんの宿題があったので、その間はお母さんと日本の学校や文化などについてたくさん話しました。

2週目のAngelaはとてもアニメが好きで、初めの2日はSakuraconというAnime conventionに妹と参加していました。日曜日の晩に帰ってきたときには二人ともNARUTOのコスプレをしていたのでびっくりしました。

Angelaの家にはトランポリンとアスレチックがあり、犬と猫とねずみとにわとりが三羽と金魚がいて、とてもにぎやかでした。家に着くとすぐに犬のSandyが熱く出迎えてくれました。Angelaには弟と妹がいて、Angelaが宿題をしている間、弟とスマッシュブラザーズとピクミンをしました。日本のゲームがアメリカでこんなに人気なんてびっくりしました。後で聞くと、任天堂が初めてアメリカ進出したのはシアトルだったらしいです。

Kent Lake の日本語クラスは今年できたばかりなので4, 5, 6時間目の3時間しかなく、プレハブ校舎でした。みんなそれぞれに日本語名がついていて、なかにはかなりおもしろい名前もありました。日本語一年生とは思えないくらいみんな日本語が上手でした。

アメリカの学校は日本と違って何もかもが大きかったです。生徒は2600人もいて、

いつも賑わっていました。車で登校する生徒も多く、学校には巨大な駐車場がありました。また、アメリカ人は日本人と違ってみんな明るくて、開放的だったので新しい授業に参加する度に名前を聞かれ、たくさんの質問をされました。

アメリカでは語学の選択肢が多く、スペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、日本語などがあり、2年間の課程を終えて、3カ国語めを学ぶ人や、母国語と英語ともう1カ国語を学ぶ人もたくさんいました。他にも、新聞、写真、陶器、車の解体、料理、オーケストラといった魅力的な授業もたくさんありました。毎日同じ時間割なので、どれもこれも専門的でした。音楽クラスの生徒はすごく声が美しく、陶器クラスの生徒は職人みたいでした。

アメリカのお菓子は甘いと聞いていたのでかなり覚悟して行っただのですが、どれもこれもおいしかったです。アメリカのお菓子にはほとんどフロスティングという砂糖のクリームがついていて、それが甘さの素でした。日本の生クリームの代わりにフロスティングを使っていたので生クリームのついたものは1つもみかけませんでした。

そして、一番驚いたことが、アメリカ人はアバウトで大胆だということです。待ち合わせの時間があってもほとんど時間通りに来ることはなく、遅れても誰も気にしません。ある意味のんびりしてよかったです。

また、日本のごはんをすべて食べきる必要はなく、みんなどんどん残していました。ごはんは残してはいけないと教えられていた私にはかなり衝撃的でした。アメリカと日本の文化の違いをひしひしと感じました。初めのほうは気をつけていた私ですが、アメリカで生活しているとすっかり慣れてしまい、大胆になっていきました。周囲の影響力はすごいなと思いました。

一番嬉しかったことは、日本語クラスで教えてあげていた女の子に英語が上手だから日本語が分からなくても理解できると言われたことです。本当にうれしかったです。初めは激しいJapanese Englishだった私の英語力もだんだん上達していき、何もしなくても英語がでてくるようになりました。もっともホストに尋ねるとまだまだJapanese Englishと言われてしまいましたが(笑)。やはり英語を学ぶには普段英語を使っている国で自ら英語を使うことが一番の近道だと思いました。

英語について一番感じたことは、専門的なことを話さない限り日常会話はとても簡単で、難しい文法はあまり必要ないということです。また、単語力が大切だと気づきました。簡単な文でも単語を知らないという意味が通じません。あることを説明するときに忘れていた単語があり、的確に説明できないことがあったので、学校での英語の授業をもっとしっかり聞いておけばよかったと少し後悔しました。

アメリカでの生活はとても楽しく充実していたので、ずっとアメリカにいたいとばかり思っていました。かなり馴染んでしまったので、自分はアメリカ人だと思い込み、全く日本に帰る気がせず、逆ホームシックにかかってしまいました。

日本に帰ってきた今、いろんなことにカルチャーショックを受けています。私の頭はアメリカに染まってしまった……。アメリカで毎日使っていた英語も日本には乏しく、周りは日本語だらけ。当たり前のことですが、少し寂しいです。この二週間で学んだアメリカの文化や言葉、たくさんの仲間を忘れないように、そしてもっと英語を学ぶために、いつかはアメリカに行って勉強したいと思います。ホストや友達との別れはとても辛かったですが、いつかまた会えると信じています。私を受け入れてくれたホストファミリー、先生、そしてたくさんのアメリカの友達のみなさん、本当にありがとうございました！！

My Precious Memories

3年 6組 N.A

めっちゃ長いフライトの末、ようやくアメリカに到着です。これから2週間も全く言葉の通じないところへ行くのだという不安と、興奮と、機内の狭さで眠ることができず、初っ端から睡眠不足な状態で今回の短期留学は始まりました。

空港にはそれぞれの生徒のホストとその家族が待っていてくれました。私の1週目のホストのKellyは15歳だったのですが、私よりも年下だとは思えないほど大人っぽい人でした。そして、空港からの帰りの車内からいきなり英語漬けの生活が始まりました。機内でちょっと頭に入れておいたので、自己紹介したり、アメリカについてわからないことを聞いてみたりして、英会話に挑戦しました。私の今回の留学での目標は『この2週間にできるだけたくさんの人と英語で喋ること』でした。最初はなかなか聞き取れず、何度も何度も聞き返していて会話が進みませんでした。もっと話したいのに！と思う気持ちが空回りしてもどかしかったです。でも、Kellyも家族も私ができるようにゆっくり話してくれたり、簡単な言葉で言ったりしてくれました。家での生活には意外にも、電子辞書はあまり使うことはありませんでした。だけど、もしものときのために常に携帯はしていました。ところが学校では、私たちにも全くお構いなしにネイティブのスピードで話しかけてくる人もいたので、何回聞き直しても何を言ってるのかわからないときもあり、そんなときは“Yeah!”などと言って適当に受け流してしまったこともしょっちゅうでした……。

着いた日は土曜日で学校もなかったのも、Space NeedleやPike Place Market (スタバ1

号店があります)へ連れて行ってくれました。日曜日はEasterだったので、朝に教会へ行った後、親戚で集まってホームパーティーをしました。

3日目からいよいよ学校です。Kellyは0限目(1限目の前)にBandの授業を取っていたので、朝の6時20分に家を出ました。朝がこれだけ早いからなのか、就寝時間も9時と、めちゃくちゃ早かったです。車かスクールバスでの通学だったので、日本語では私は自転車に乗って、電車に乗って、それから歩いて通っている、と言うと、Kellyは、そんなの毎日できない!ととても驚いていました。授業はもちろん全て英語なので理解できる訳もなく、唯一内容がわかったのはJapaneseの授業だけでした。Kentwoodの生徒もKentlakeの生徒も授業中には積極的に質問をしているところが日本と全く違うなぁと感じました。かと思えば、授業中にジュースを飲んだり、ガムを噛んだり、廊下で勉強道具を広げている生徒もいたので、さすが「自由の国アメリカ!」とも思いました。そして、みんなすごくフレンドリーで、授業が一緒だったり廊下ですれ違ったりしたときにみんな声をかけてくれました。中には「こんにちは」と日本語のあいさつをしてくれる人もいました。

大半の人が気になる(?)だろうと思うアメリカ人の食事についてです。アメリカの食事といえば、すごいボリュームで見た目からしてお腹いっぱい・・・というのを想像していました。地域や家庭によってさまざまだとは思いますが、私のホストファミリーは思ったほどの量も食べなく、むしろ日本人より少食なくらいでした。そして炊飯器が家にあり、お米も時々食べるのだそうです。でもやっぱり、ほとんどの料理が油っこく、味も濃い目で、ケーキなどのお菓子類は思わず声を上げてしまう程甘かったです。

週末にホストの交代があり、2週目のホストはお父さんが日系人のJackiでした。お父さんは時々日本語の単語も交えて話してくれました。Jackiの家は湖に面していて、その湖にボートを出してくれました。夏にここでジェットスキーをすると本当に気持ち良いそうです。ボートを持っていたり、ホームシアターがあったり、アメリカと日本の家の規模の違いを感じました。(ちなみにKellyの家には家の何倍もの広さの庭がありました。)放課後はほとんど毎日、いろんなところ(主にショッピング)に出かけました。特に印象に残っているのはTheaterという演劇の授業のPlay(劇)を観に行ったことです。これは夜に学校で公演がありました。本当に高校生の舞台!?と疑ってしまう程セットや衣装も本格的で、役を演じている生徒の演技もすばらしかったです。

Kentlakeではいなりを作って販売したり、昼休みに書道をしたりしました。そのためあまり授業に出ることができず少し残念ではありましたが、生徒の日本に関する関心が強いことは嬉しかったです。

初めは長いと思っていた2週間も毎日が充実していて、本当にあっという間で、気がつ

けば帰国の日になっていました。実際にアメリカの高校に通うなんて、高校生である今し
かできない経験をすることができ、たくさんの人と出会って、単に文化の違いと言ったも
のだけでないたくさんを学びました。そして別れ際、いつかまたもっと英語を話せ
るようになって再びアメリカへ戻ってくることも約束しました。

一生忘れることのできない思い出となりました。本当にありがとうございました。

二週間の記録

3年7組 O・A

まず、一番大切なことを書いておかなければならない。楽しかった！とにかくこの一言
に尽きる。僕達にアメリカの高校訪問という、これを逃せば二度と無いであろう貴重な機
会を与えてくださった方々に感謝したい。本当にありがとうございました。

それから、今の二年生で少しでも興味を持っている人達へ言っておきたい。是非行って
きてください。こればかりは自分で体験しなければ価値はわからない。こんなことを書い
て今年度の倍率が跳ね上がっても責任はとらないけれど。英語力や生活習慣の違いについ
て心配している人がいるかもしれないが、それは実際に行けば結構どうにでもなる。人間
一週間ぐらい昼食がピザのみでも案外飽きないものだ。少々カロリーが高かろうが、まあ
「さすがアメリカ」という程度のことである。会話に関しては、二、三日もすれば自然と
耳や口が慣れてくる。高校生ともなれば、それなりの土台は出来ているのだ。だから少し
でも行ってみたい気持ちのある人は心配などせずに積極的に手を挙げることをお勧めする。

さて、僕が向こうで過ごした二週間について、先生からはいくら書いても構わないと言
われてはいるものの、下手な文章でみんなの二倍三倍も紙を刷らせたのではさすがにただ
の変な奴、ひいては森林の敵である。向こうでつけた日記はかなりの量になるが、ここ
には出来る限り簡潔にまとめて、感想も交えて記そうと思う。

僕達は前半と後半で別々のホストファミリーに受け入れてもらい、最初の週にKentwood、
後半はKentlakeに通った。空港に着くとSmith家のConnorとお母さんのJonnaが迎えに来て
くれていた。シアトルはまだ寒かった。二人と一緒に車に乗り込むと、そこから月曜日ま
では丸二日間日本語が耳に入ることはない。道中窓から外を見るとさすがアメリカと言う
べきか、道も広く、あちこちに芝生の庭が見え、大きな家も多かった。そして特に驚いた
のは、町のあちこちに桃色の花を咲かせた桜とおぼしき木が植えられていたことである。

その日は一度家に帰ってからボーリングに行ったのだが、帰ってからはさすがに眠気に勝てなかった。次の日などまだ暗い時分に目が覚め、一時間くらいかけてやっと寝付けたと思ったら次に目覚めたのは午後四時だった。

月曜からは学校に通った。向こうの校舎のイメージは広く、低い。日本よりはかなり開放的な印象で、雰囲気としては大学に近い。Connorは一時間目から日本語の授業をとっていたので内容は分かったのだが、結局自己紹介の後は英語で質問攻めだった。その他の授業は大体何の話をしているのかはわかる程度。それでも話の流れすら理解できないことも何度かあった。それと比べるとConnorの友達との会話はまだましで、相手が意識してゆっくり話してくれたこともあってそれなりに理解できた。三日四日と経つとだんだん慣れてきて、それほど悪くないと思える程度にはなった。Connorは放課後柔道教室に通っていたり日本のマンガが好きだったりして、周りにも日本好きの人が多かった。向こうでの日本文化の影響の大きさには何だか妙に感心してしまった。

ここで向こうでの授業について触れておこうと思う。生徒が選択できる授業のバリエーションは日本とは比べ物にならない。外国語が五、六種類に心理学などの専門的な科目や演劇、オーケストラ、コーラスは勿論、陶芸や自動車整備などの技術を学ぶクラスまである。二週目の最初にKent lakeの演劇クラスの公演を見に行ったら本格的という評価すら失礼なぐらいのレベルの高さに圧倒されたのだが、音フェス等の行事の際の雰囲気を思い出すと、そういうノリというかエネルギーというのか、北野生とどこか通じるところがあるようにも感じた。

それから、いわゆる「講義」形式の授業について。毎年の先輩達書いているのでみんな知っているかもしれないが、あちらの生徒は授業中喋りまくりである。だが実際に行ってみると、少なくとも僕が想像していたよりは大人しい印象を受けた。というのも、全員が授業に集中し、参加していることがはっきりとわかるのだ。少人数ということもあるだろうが、先生も話をしながらしょっちゅう質問をするし、生徒も合間合間に質問や意見をどんどん述べる。授業によっては講義と言うよりも、先生が議題を与えて全体の流れをリードしているという雰囲気のものもあった。もう一つ日本の学校と大きく違うのは、生徒が授業中に普通に飲み食いしていることだ。これに関しても僕は最初どういう雰囲気なのかいまいち想像がつかなかったのだが、実際に目にとると非常に納得がいった。全く違和感がないのだ。これには僕は少なからず感心してしまった。早い話、僕達が友達や家族と話をするとき、その内容が真剣なものだからと言って飲み食いしてはだめだということになるだろうか。こちらの授業を「受けるもの」とすれば、向こうは「出るもの」とでも言うのか、参加するのが当たり前なのだ。日本とアメリカでここまで形態が違っているとどちらが

より良いなどと決められる訳もないが、北野生も姿勢の上では幾らか見習うべきところがあるのではないかという気がした。

二週目はShiraishi家（お父さんの家系が日系）のCoryと一緒にKentlakeに通った。Kentwoodと比べると新しい分建物はきれいで、もうあまり学校という感じもしなかった。両校は距離的には近いのだが、Kentlakeの方は遠くからの学生も多く、スクールバスの本数が全然違った。Coryの家の周りも殆ど森と言っていいような雰囲気で、近所には馬や牛を飼っている家まであって羨ましい限りだった。二週目は北野・阿武野生全員で出かける予定が割合多く、忙しかった。その上Coryと弟のKirbyのサッカー・野球の試合などまで重なって、お母さんは一日に何度も送り迎えをしてくれた。そのせいもあってか、こちらの家に移った頃から残りの日数がどんどん減っていくように感じた。最初の週は日数を積み重ねていったが、後半は日一日と残りがなくなっていく感じ。

学校ではやはりたくさんの人と話が出来た。Kentwoodでもそうだったが、向こうはとにかく人が多い。なにしろ生徒数が2500人とかなのだ。だからその辺ですれ違ったただけの人でも結構声をかけてくれたりした。また、授業によっては近くの人とそれなりに話す時間もあり、曲がりなりにも会話が成り立ったので、一応これぐらいの英語はわかるようになったんだなあと思うと嬉しかった。

ところで、英語に関してはこの二週間で、聞くにしろ話すにしろもう少しだから頑張ろう、と思うことが出来た。日本にいてどうしてもモチベーションが下がりがちだが、何となく先が見えたような感じがしたことはとても大きな収穫だった。英語の勉強にも色々あるが、日本の学校で習うのは「書き言葉」だ。会話に関しては自分で意識して身につけない限り学校で習得することは難しいと思う。そしてこの両方において不可欠なのが「語彙」だということが今回身にしみたと共に、こと会話においてはもう一つなくてはならない条件があることを実感した。それは「考えずに話せる」ということである。なんや当たり前やんけ、と言うなかれ。僕達が英作文と称して必死に頭を絞って作り出す文章の数々が会話の中で必要に応じて口から飛び出すなどということはほぼありえない。基本的に考えなければ作れない文章はまだ自分のものになったとは言えないと思う。この問題を解決するには、本を読むのが一番だというのが僕の考えだ。勿論ただひたすら英作をやってもそれなりには伸びるだろうが、やはりその英作のベースとなる能力を培うにはインプットを増やすしかないと思う。学校では最低限の骨組みとなる文法など（これがなければ何も出来ない）を教えてくれるのだから、それらを本当に身につけて使えるようにするのは自分の仕事だ。それは授業時間だけでは無理がある。そのかわり自分が読む本に関しては最大限選り好みできる。と、ここまで思ったことを少々書き散らしてきたが、自分で言

ってて耳が痛い。まあ自分の勉強なのだからマイペースでやっていこうと思う。みなさんにも英語力を鍛えたいなら英語の本を読むことをお勧めしておく。

さて、はじめはもっと長いかと思われた二週間も、過ぎてしまえばすぐだった。冒頭には簡潔にすませるとか書いたような気もするが、この枚数なら昨年度の平均の二倍は堅い。まあいいや。アメリカが気に入って日本に帰るのなど真っ平御免ムードだった僕達は、二日前ぐらいから "We will be exile!" (exile=亡命者。ご存じだったろうか?) などと未練たらたらであった。向こうでは日常生活の細々した用事もなければ、気にしなければならぬ予定もなかった。とりあえずその日を楽しんで次の日の用意だけすれば良かったから、すごくりラックスした日々を過ごせた。だがそれはあくまでも「旅先」の「非日常」だからこそ味わえる楽しみだ。旅行が短すぎて帰りたくない、なんていうのは多分その短さだからこそ思うことなのだろう。

最後に、こちらから一緒に行った先生方と友人達、そして向こうで知り合ったたくさんの人々とこのように縁があったことに感謝して、締めくくりとさせていただく。

出会いと別れの2週間

3年8組 E・M

念願のセントウッド高校派遣生に選ばれ、初めてのホームステイに少々不安はあったものの、アメリカでの生活が楽しみで仕方がありませんでした。待ちに待って出国の日を迎え、アメリカ行きのフライトも長く、考え事をしすぎて眠れない憂鬱な初日となりましたが、現地に到着するや否や夢のような毎日が過ぎていきました。

まず、私をいきなり待ち構えていたイベントは結婚式の参列でした。一週目のホストであるBonnieの両親と親しく付き合っている女性が、ちょうど私の到着する日に結婚式を挙げということで、私も招待してくださいました。皆とゆっくり挨拶をする暇もなく、家に着いてすぐにドレスに着替え、車で式場へ向かいました。アメリカの結婚式を初めて体験して、前半は日本の式と特に変わりはないように思えたのですが、後半は新郎新婦や出席していた大人たちの大半が終盤までずっとダンスを楽しんでいたことにびっくりしました。アメリカ人は小さいころからダンスをする機会が多く、誰でもいくつかの踊れるナンバーがあるそうです。日本では絶対にあり得ないことだと、このとき初めてカルチャーショックを受けましたが、ブーケトスなど貴重な体験もさせていただき楽しかったです。

Bonnieはスポーツ、勉強、音楽、ゲーム等なんでも上手にできて、しっかりした15歳で

した。一緒にゲームをしたりボーリングに行ったり、生活においてもいろいろ世話をしてくれました。あらゆることに一生懸命で、授業にも積極的に取り組む姿は尊敬すべきだと思いました。Bonnieは人見知りでシャイな一面もあり、純粋で可愛い女の子なので、彼女と本当に仲良くなり別れるのが辛かったです。

二週目はLaurenのお家に泊めていただきました。彼女は将来日本で英語の先生になりたいようで、日本語をとて熱心に勉強していました。私がLaurenにおにぎりの作り方や日本語を教え、彼女や彼女のお母さんから英語を教えてもらいました。また、Laurenのお父さんが小学校の先生をしておられたので、同行した北野のメンバーと共に勤め先の小学校へ行くことになり、生徒に日本について教える機会を作ってくださいました。意外にもたくさん子どもたちが日本の生活などについて様々なことを質問してきて、私たちがつたない英語で答えるのを興味津々と聞いてくれました。また、毛筆で生徒全員の名前を当て字の漢字で書くと、皆は喜んでくれました。最後にお父さんや子供たちがありがとうございましたと伝えてくれて本当にうれしかったです。

ケントの高校の授業は実に多様で、どれも興味深かったです。「オーケストラ」では弦楽合奏が行われていて雰囲気良かったので、ずっと授業を見ても飽きませんでした。「CWI（社会）」では、銃の保有問題やアメリカの大統領選がテーマになっていて、アメリカらしい授業だと思いました。

生徒たちは、制服姿の私たちを見かけると「オハヨウゴザイマース」と声をかけてくれたり、授業中でも話しかけてくれる子がいたり人なつっこい印象を受けました。生徒にディスプレイが回転する携帯や折り紙を見せると、非常に興味を示していました。また、日本語の授業を取っていない生徒でも、シール等の和風の小物を渡すと異常なほど喜んでいました。書道にしても、そんなにもらってどうするのかと思うくらい何枚も書いてもらっている人がいました。特に日本語の授業を選択している生徒は日本に住んでいる私たちよりもずっと日本が好きで、日本に行きたいと思っている人がかなり大勢いて、一緒につれて帰りたくなりました。

食事の面においては、Bonnieの家は中国系なので私の好きな中華料理の日が多く、朝から坦々麺らしきものが出てくる日もありました。Laurenの家はお母さんがとても料理上手だったので、サラダやステーキなど全てのメニューが絶妙なバランスで味付けされていました。平日の昼ごはんは食堂でサンドイッチやピザを食べていましたが、時々売られているサラダがとてもおいしかったです。

観光においては、各家族にいろいろな名所やお店に連れて行ってもらいましたが、一番良かったのは学校の皆でシアトルマリナーズの開幕戦を見に行ったことです。アメリカ

人らしい応援でとても盛り上がったし、イチローを直に見ることができて野球に縁のなかった私でも十分に楽しめました。ただその数日前はケントで異例だという雪が降ったほどの寒い天気が続いていて、寒さに耐えながらの観戦となりました。

英語は会話においては、ホストの家族がゆっくりときちんとした英語を話してくれたので大体理解できました。自分が話すときは、時制や語順がめちゃくちゃになっているのはわかっているけど、気にしている場合ではありませんでした。わからない単語が出てくればそれ以降はまったく頭に入りませんでした。また、自分の思ったことをそのままきれいに伝えるには語彙力が全然足りないこともわかり、もっと英語を勉強しなければならないと実感しました。

人と人との繋がりには、年齢、性別、宗教、民族の違いなどは全く関係がないと改めて感じました。日本では、普通学年が一つ違うだけで先輩・後輩という意識が生まれますが、アメリカではそういう意識は低いようで、歳が違ってても対等に話していました。そんな違いを気にしなくても、自然と気が合う子とはすぐに仲良くなれるし、むしろ気にしないほうがよりお互いにとって良い付き合いができるということがわかりました。Laurenのお母さんが、「あなたぐらいの歳になると、大人の人に対しても下の名前で呼んでもいいのよ」とおっしゃっていたことが、とても印象に残っています。

今回は私が幸運だったただけなのかもしれませんが、特に困ることもなく毎日本当に楽しく過ごすことができました。できるならすぐにでもアメリカに戻りたいと思っています。日本に帰ってきてから、将来アメリカへ留学することを真剣に考えるようになりました。

最後に、私の3つの家族、友達、先生、この旅を支えてくれた全てのみなさん、本当にありがとうございました。これからもアメリカで出会った人たちや学んだことなど、数々の思い出を決して忘れません。

ケントウッド高校を訪問して（平成20年3月22日(土)～29日(土)）

英語科 加藤 悦子

2007年度のワシントン州シアトル、ケント地区の高校訪問に参加して、このプログラムの醍醐味は、ホームステイにあると実感しました。アメリカの家や家具調度品、あたりの環境、生活習慣や食事など、身近で体験する文化の違いが一番興味深く、心に残りました。

12時間の飛行を終えて到着したタコマ空港には、ケントウッド高校日本語教師のミヤ

ーン先生、私のホストを引き受けてくださったスペイン語担当のザモラ先生、ケントレイク高校の副校長メルトン先生をはじめ、ホスト全員のみなさんが出迎えてくださいました。初対面の感激を次々写真に納めてしまうと、みんな、あっという間にホスト宅へと消えてしまいました。不安にとまどう間もなく2週間のアメリカ生活スタートです。ケントウッド高校での授業の様子などは毎回紹介されていますので、今回は食べ物を中心に（私の）アメリカでの生活をお話したいと思います。

Seattle Art Museum

到着したその日にザモラさんの車でシアトル市内の観光に直行しました。シアトルは一度来たことがあるので、今回はシアトル美術館を再訪しました。通称SAM (Seattle Art Museum) は改装されていて以前より展示物が充実していました。それから、日本コーナーができていて、伝統芸能の「能」が英語の字幕付きで放映されていました。

日本ではなかなかゆっくり見たこともなかったのですが、なんとアメリカで鑑賞する機会に恵まれました。

その後Starbucksでコーヒーを飲んでから、海沿いを散策しました。日差しのわりには気温がずいぶん低かったのですが、満開の桜の花がいたところで私たちの目を楽しませてくれました。Starbucks と桜は、なんともなじみ深い組み合わせでした。

ハンバーガーレストラン

初日はハンバーガーレストランで夕食をいただきました。メニューには、いろんなハンバーガー満載ですが、英語で書いてあると、どうもピンときません。名前に惹かれてBanzai burger (バンザイバーガー) を注文してみました。それに付くポテトのソースが何種類かあって、どれにするか聞かれてはいるんですが、どんなソースか全くわかりません。ザモラさんのご主人の助け船で、ようやくソースを選びました。

バンザイバーガーは「照り焼きチキンとパイナップルバーガー」で大型フレンチフライ付きでした。大型カップ入りペプシコーラを飲みつつ、ビッグなハンバーガーにかぶりついて、ポテトを一つ二つ食べるともうお腹一杯。残念ながらポテトは食べきれず残してしまいました。ちなみに、大型のカップのペプシコーラは、空っぽになるとすぐ御代わりがサービスされます。

Easter Sunday

翌日は復活祭の日曜日。ザモラ家恒例のEaster Brunchに行こうと誘って頂きました。

シアトルシェラトンホテルのイースター ブランチはビュッフェ形式で、大変なごちそうでした。かねてから噂に聞いていたロースターキーと克蘭ベリーソースをここで初体験しました。美味しかったです。チャンスがあればぜひ一度食べてみてください。克蘭ベリーソースが絶品です。

ザモラ家のごちそう

毎日仕事から帰ると、ワーキングウーマンのザモラさんは休日に下準備してある材料からあっという間にごちそうを作ってくださいました。電子レンジで五分で炊けるライスとか、冷凍タコスとか、アメリカならではの便利なものもありました。中心はメキシコ料理で、毎日とてもおいしくいただきました。

滞在中にザモラさん特製クッキーの作り方を教えてもらいました。バターを練ったところに小麦粉と oats を混ぜてカシューナッツとチョコチップをたくさん入れます。それを均一な大きさにスプーンで丸めてオーブンで焼きます。約2時間で、しっとりとしたクッキーの完成です。

アメリカのキッチンは何んでも大型で機械化が進んでいます。余談ですが、ケントウッド高校の家庭科の調理実習で見せてもらった、リンゴの皮をむきながら芯を取り除き、同時に水平に薄くスライスする道具には驚きました。

ケントウッド高校のカフェテリア

サンドイッチ、温かい料理（ハンバーガーなど）、ピザの3つのセクションに分かれています。自分の好きなものを選んでトレイに乗せてからレジでお金を支払います。パック入りサラダやミニリンゴ、チョコレートブラウニーなども売っています。スナック菓子を売る売店も別にありました。学生が経営しているコーナーではホットコーヒーがあったように思いますが、冷たい飲み物ばかりです。まだ寒いのに、半袖半ズボン姿の学生が冷たいドリンクを飲みながらランチしていました。

私はマッシュポテトにグレービーソースをかけた温かい料理が一番おいしかった。

最後に、ケントウッドの日本語クラス

先生が「みなさん、元気ですか」と聞くと、生徒たちが声をそろえて「元気です、おかげさまで」という挨拶で授業が始まりました。

音声に重点をおく授業で、生徒たちは聞いた音を暗記して会話を再現しなくてはなりません。覚えた日本語を滑らかにしゃべっているのですが、本人たちは何を言っているのか

わからないという奇妙なことも起こっていました。上級クラスの生徒たちの中にはとても流暢に日本語を話す生徒がいて、アメリカ式日本語教育の成果が表れていました。

壁に貼ってある漢字カードに學・國などの旧字体が混じっているのにはびっくりしました。生徒たちは漢字もかなり練習していましたが、書き順という概念がなく、そんな形にできあがるように書いているということにも、びっくりしました。

今回の参加で、ケント地区のあるコビントン市は国際交流に力を入れていることがわかりました。日本から来た高校生は市役所で市長さんからの歓迎の言葉と、数々の記念品をもらいます。この地区にある4つの高校はそれぞれ独自の姉妹校を持っているようですが、国際交流に対する姿勢には違いがあります。本校と姉妹校提携を結んでいるケントウッド高校は、北野高校からの訪問を日本語クラスの行事としてとらえていて、残念ながら学校全体のバックアップが十分と言えませんでした。ケントウッド高校との交流が始まり十数年経過した今、様々な角度からこの交流を見直す時期に来ているのかもしれない。

最後になりましたが、今回はアメリカの高校や家庭に直に接する機会を与えていただきありがとうございました。今後も、より多くの生徒が異文化を体験し、共通言語のありがたさと、語るべき話題をもつ大切さに気づくことができる機会があるよう願っています。

ケント再訪 (平成20年3月29日(土)~4月5日(土))

社会科 浜野 斗紫子

阿武野高校で転勤が決まったとき、まさか北野高校へ配属になるとは思わなかった。ましてや、この国際交流に関わることになるとうとは思わなかった。(正確には国際交流にだけは関わろうとは思わなかった、というべきか。)なのに、どうしたことが、またまた、転勤1年目にしてアメリカはワシントン州に行くことになってしまった私。うー意志薄弱!!! ということで、今回は私にとって2回目のケント。さらに、ホストを引き受けてくださったのが、2002年にお世話になったディアン先生。彼女が日本に来られたときにはホストを引き受けたこともあり、お互いによく知った間柄、そんなこんなで全く緊張感なく日本を旅立ったのであった。それでも、今回は盛り上がる大統領予備選挙の真っ最中、ワシントン州の予備選挙は終わっているとはいえ、連日メディアで取りあげられているような熱気をじかに感じられるのではないかと、サブプライム問題で後退するアメリカの現状をこの目で確認できるのではないかなどと少しワクワクしながらの旅立ち。羽田から成田へのうっとうしい移動を経ていよいよ米国入国。9.11の翌年に比べても、さらに入国

審査が厳しくなっている。写真撮影？いや、眼球の虹彩を記録しているらしい。「テロとの戦い」だかなんだかを続ける米国としては止むを得ないのだろうが、なんだか不愉快。ピースをしたら、審査官はどんな顔をするだろう？ “ハイ、チーズ！” できめてやろうと意を決したものの、いざとなると極々ノーマルな対応をしている人畜無害の私。うー意志薄弱！！

傷心のうちに入国審査を完了し、空港でホストの出迎えを受ける。懐かしいDige夫妻、「ふむ、少し貫禄がでたな」と内心思いながら、車に乗せてもらう。やはり、ガソリンの価格上昇は頭の痛い問題だそうだ。「車しか移動手段がないからね」とマーク（Dige先生の伴侶）。それでも日本のガソリン価格に比べるとかなり安い。車からみえるケントはやはり自然が豊かで家々もきれいだ。おまけに新しい豪邸（日本人からみればまさに大邸宅）があちこちで建設中である。ここでちょっと頭が混乱。日本で連日ニュースを賑わせているナントカ問題はどうなってるの？ “FOR SALE” の中古住宅のオンパレードを想像していた私にとって、日本のニュースはガセネタだったのかと疑いたくなるような気持ちである。さらに、その後の7日の間、全く大統領選の熱気の余韻もなし。普通の平穏なアメリカ人の家庭生活の仲間入りをするようになった。とはいえ、ケント地区の4つの高校で国際交流を発展させているようで、東京・広島の教師を含めての食事会や観光が多く企画されており、こじんまりとしていた6年前とは随分と様変わりした印象を受けた。様変わりといえば、ケントレイクに日本語クラスができたこと。その日本語の先生に大阪出身のとも子先生がおられたことも大チェンジである。おかげで、チンプンカンプンの話を通訳してもらえて大助かりであった。

そんな拡大日米交流ツアーの一環で連れて行ってもらったのが、ボーイング社の航空博物館。特に嬉しかったのが、大統領専用機に搭乗（？）できたこと。あのケネディ大統領が、かのニクソンが電撃的に中国訪問の際に乗ったのも、この飛行機なのだ。このソファを数名で囲み、戦略を練ったに違いない。意外と小型の航空機であったが、中はやはり特別仕様、重厚感漂うソファを眺めながら、ものいわぬ歴史の証人とでも言うべき機体に身をおき、この場に来ることができた事にただひたすら感謝の気持ちで一杯になったのであった。

いたずらっ子のカイルとディアン先生が飛行船体験にいている間、ボーイング社のエンジニアであるマークにちょっと地味な場所にも連れて行ってもらった。写真が壁一面に展示されてある。「この写真、ボーイングの工場、民家にしか見えないでしょう？」とマーク。戦争中、日本に爆撃されないようにカモフラージュしていたとのこと。「日本はそ

の頃、槍でB29をやっつけるなんて馬鹿なことってたのに、そんなことありえない」というと「Who knows ?」と笑いながら返事が返ってきた。アメリカもやっぱり必死だったということか。その時にふと6年前の会話を思い出した。戦争中に日系アメリカ人が強制収容所に入れられたことを扱った番組を見ながら、「我々アメリカ人は間違ったことをした。大変ひどいことをした。日本の人々に謝らなければならない」と言ったマーク。戦争中にひどいことをしたのは、我々も同じこと。大事なのは歴史から学びかつ反省し、同じ過ちを繰り返さないこと、それとこうした人間のつながりなのだろうと思う。

閑話休題。下の写真は北野オールスターズがケントの小学校に招かれたときの写真である。「質問のある人!？」と先生が言った途端に手があがるわ、あがるわで、積極的な小学生たちに脱帽! と同時に彼らの英語での質問を理解し、英語で答えていた北野のみんなにも脱帽したのであった。ちょっとおもしろかったのが、「普段、学校から帰ったら何をしますか」との質問にたいして「××と勉強、宿題」と一様に北野生が答え、子供たちが「また勉強、みんな勉強・・・、本当かな～」みたいな顔をしたこと。すかさずケントレイク校のエリック先生が「ちょっといいかな、北野高校は学業で大変高い評価を受けている学校なんです。」とフォローをしてくださり、子供たちも納得した様子でした。

いよいよ、ケントレイクでの学校生活の紹介である。マーケティングクラスの先生が、日本の文化を紹介しつつ、商売もしたいということで、稲荷寿司を作ることになった。正直なところ、稲荷寿司の出来はよろしくない。最大の原因は、お米のたき方であるが、時間の都合上、致し方ない。稲荷も“缶入り味付け稲荷”なる不思議なものがあり、寿司酢も出来上がったものが瓶入りで用意されていた。要は混ぜて詰めるだけである。それでも、手を動かす作業の中で、初めはぎこちなかった日米両方の生徒が徐々に打ち解けていったように思う。やはり、こういった体験コースはいいものだ。北野での交流の際にもこのようなプログラムを用意できればいいなと感じた。ちなみにアメリカの生徒たちは概してブリキチョコのようだ。手先の器用さでは日本が断然有利とみた。まだまだ、日本の将来は暗くない。がんばれ、ものづくり大国 日本!

肝心の稲荷寿司はおかげさまで、完売でござりました。

こんな風に学校で過ごす一方、プライベートではディアン先生のお友達の所で乗馬をさせてもらった。小学生のかわいらしいお嬢さんのいるご家庭である。母親として夕餉の支度もあり忙しいだろうに、こうして見ず知らずの異国の人間のために夕方の時間を割いてくれる。本当に有難いことである。彼女は裸馬に乗るのが好きだそう。幼い頃は裸馬に乗って川まで行き、川の水で馬の身体を洗ってあげたらしい、インディアンの格好をして。

忙しいのか、暇なのか判別できないうちに一週間が過ぎ、日本へ帰る日が来た。空港まで送ってくださる教頭先生の車から外を眺めてもワシントン州の人々は、豊かな自然に育まれて人生を楽しんでいるようにみえた。どういう話の展開からか、教頭先生が湾岸戦争の時、イラクで従軍していたと言われた。少し驚きながら随分と危険だったのかと尋ねると、あの時は危険ではなかったとの返事。そして、「今のイラクは危険だ。息子が今、イラクにいるんだがね」と言葉を継がれた。それは心配ですねと声をかけた私に、「私は父親のブッシュには投票したが、今のブッシュには一度も投票したことはない。もうすぐ、イラクからアメリカ兵は戻ってくることが出来るさ」といいながら笑顔をみせた。明るく、楽しく、豊かに生きているように見えるアメリカの人々、その中の少なからぬ人が大事な人の生死に関わる不安を抱えて生きているのだと気づかされた車中であつた。